

領域横断的学習の題材としての簡単鍋カバー製作の試み

Practice of making a pot cover as a subject for cross-disciplinary learning

平松紀代子
Kiyoko HIRAMATSU
滋賀大学教育学部

横関 琴絵
Kotoe YOKOZEKI
滋賀大学教育学部附属小学校

<キーワード> 鍋カバー製作 領域横断的学習 保温効果 省エネルギー

1. はじめに

現代で保温調理といえば魔法瓶のように断熱性が高いステンレス製の調理器具がイメージされるが、古くは大正時代から、一説では江戸時代から火なしコンロという保温箱を用いた余熱利用の保温調理が実践されていたと言われている^{1) 注1)}。この火なしコンロの普及に貢献したのが主婦雑誌『婦人の友』^{注2)}で、1916 (T5) 年に「火なしコンロの使ひ方」という記事が掲載されている²⁾。

保温調理に用いる火なしコンロは、材料を煮立てたあと調理途中の鍋や釜を火からおろし、おがくずや古布を敷いた保温箱に入れ、布団で覆って遮熱することによって焦げつかせることなく素材を保温調理し、温かさを維持する利点を備えていた。当時はまだ一般家庭にガスコンロが普及しておらず、かまどに薪をくべて火をおこして炊飯・調理をしていた。よって火力を維持調整しながら炊事する必要があり、炊事は目を離すことができない家事労働であったなか、保温調理する火なしコンロの有用性は高かったと考えられる。

とりわけ物資不足が顕著となった戦時下には、配給される炭等の燃料を節約できることに加えて、空襲警報により緊急避難する際に火災を防ぐ防災の視点からも火なしコンロの有用性は高かったと考えられる。ところが戦後の1952 (S27) 年にはガス普及率が46.7%となり³⁾、一般家庭にもガスコンロが普及してくると、火なしコンロの有用性は低下した。

しかし1970年代に環境問題が注目されるようになると再び保温調理が注目され⁴⁾、1990年代に現代版火なしコンロといえる布製の鍋カバーが考案された。この鍋カバーは2003 (H15) 年に財団法人全国友の会振興財団により鍋帽子®として登録商標されている(写真1)。鍋カバーはミクロな家庭経営における省エネルギーという視点のみならず、環境に優しいマクロでグローバルな社会の持続可能性を目指す視点からも評価され、2002 (H14) 年には地球温暖化防止活動により環境大臣賞を受賞した。

このような地球環境を意識する視点は世界的潮流となり、2015 (H27) 年には国連が「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals (SDGs)」を中核とす

る「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を採択し、生活者の意識と主体的行動の変容が強く求められるようになってきている。こうしたなか日常の家庭生活のなかで鍋カバーを活用することは、社会の持続可能性に貢献する行動といえるものであり、SDGsの開発目標に掲げられた17項目のうち、「7) エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、「12) つくる責任、つかう責任」につながると考えられる。そこで本実践研究では、この鍋カバーの製作と活用を小学校家庭科の題材とすることを検討した。

2. 題材の開発

保温調理に関わる先行研究をみると、調理特性と条件に関する研究や災害時の有用性を探る研究が多くなされていた。その他には、環境や省エネルギーの視点から鍋カバーを題材とした家庭科の授業実践の研究もみられた。中学校家庭科で鍋カバーを題材とした授業実践では、環境に配慮した消費生活に関連して子ども用防寒具をリメイクし、省エネ鍋カバーを製作するものであった⁵⁾。また同じく中学校家庭科で、市販の保温鍋と手作り保温鍋(鍋を新聞紙とフリース布地で包んだもの)を用いてスープを保温調理し、温度降下の比較実験が行われていた⁶⁾。いずれにおいても生徒が日常生活を見直す機会となり、持続可能な社会の構築に向けて生活を工夫しようとする学習効果が確認されていた。



出典 『魔法の鍋帽子』(2012) 表紙

写真1 全国友の会考案の鍋帽子

近年保温調理で活用されている全国友の会が考案した布製の鍋帽子®の作り方は、『魔法の鍋帽子』⁷⁾に詳述されているが、直径 22～27 cm の一般的な家庭用両手鍋に適したサイズで、表布（木綿、ウールなど）と裏布（木綿）を縫い合わせ、なかに綿を詰めて製作するものである。この鍋帽子®の製作過程には、立体的に仕上げるための曲線縫いや、保温効果を高めるために綿を入れる工程があり難易度が高い。

こうしたなか滋賀大学大学院生であった柿木雅子氏が、鍋帽子®のメリットを残しつつ直線縫いでも製作可能な簡単鍋カバーを 2019 (R1) 年に考案された。これは概ね 55 cm x 80 cm の布の短辺を折り返して縫ったあと二つ折りにして、裾を 5cm ほど折り返し（写真 2）、両サイドを縫って仕上げるものである。材料の布は鍋のサイズに合わせて準備し、仕上がりは 50cm x 35cm 程度で製作する。保温の工夫としてキルト布を用いたり、綿の代わりにアルミシートを用いて裾の折り返し部分に挟むことで保温性が高まり、綿より厚みが薄く収納時にはコンパクトに折り畳むことが可能となっている。上部の両端にボタンとループ紐を取り付け、とじると両手鍋にかぶせるのに適した形状になり（写真 3）、外すことで横長のサイズになり取っ手が長い片手鍋やフライパンに適した形状となる（写真 4）。また座布団も曲線を縫う円形ではなく、直線で縫う四角形とすれば小学生でも製作可能となる。試作した鍋座布団には古着を詰め、子ども服（サイズ 70～80cm）が程よい大きさのカバーとなり、かわいいデザインとなるだけでなく、取り外して洗濯できる工夫を施すことができた（写真 5）^{注 3)}。この簡単鍋カバーや鍋座布団であれば、小学校家庭科において目的に応じた縫い方を理解し、布を用いた製作を工夫する学習の題材とすることができるといえよう。

なお、ここに簡単鍋カバーの保温効果を試した実験結果の概要を示しておく。2022 (R4) 年 12 月 21 日に外気温 10℃、室内は 24℃の温度設定のもとで実験を行った。一般的に小学校の調理実習室に備えられているものと同程度の深型 28cm の大きさの両手鍋を 2 つ準備し、それぞれ 1.5L の味噌汁を調理した。2 つの鍋の味噌汁を沸騰させ、温度計で温度を測定したところいずれも 98℃であることを確認した^{注 4)}。その後、1 つの鍋を鍋座布団に置き簡単鍋カバーをかぶせ、もう 1 つの鍋は鍋座布団の上にカバーをかけずに放置した。70 分経過後に再度温度を測定したところ、カバーなしの鍋は 53℃にまで低下していた一方で、簡単鍋カバーをかぶせた鍋では 70℃を維持していた。気温が低い時期に実験したため、蓋をあけた際にたちこめる湯気の様子を視覚的に見ることもでき、簡単鍋カバーを利用した際の保温効果を実感しやすいことも確認された。

3. 指導計画と授業実践

1) 学習指導要領との関連

2017 (H29) 年に小学校学習指導要領および中学校



写真 2 布の準備



写真 3 簡単鍋カバー（両手鍋）



写真 4 簡単鍋カバー（片手鍋）



写真 5 鍋座布団

学習指導要領が、翌年に高等学校学習指導要領が告示され、移行期間を経て2020（R2）年度から小学校、2021（R3）年度から中学校、2022（R4）年度から高等学校において全面実施されることである。改定のポイントとなる三つの柱が、1) 知識・技能、2) 思考力・判断力・表現力等、3) 学びに向かう力・人間性等の涵養であることを意識し、家庭科の諸領域に関わる領域横断的な学習が可能となる指導計画を検討した。

従来から小学校学習指導要領では衣生活領域の学習として、生活を豊かにするための布を用いた袋型の物の製作が求められており、簡単鍋カバーは新しい題材となると考えた。そして、この簡単鍋カバーを家庭科学習の題材とすることで、被服製作する衣生活領域のみならず調理の観点から食生活領域、保温の観点から住生活領域、自分や家族のために家庭で活用する観点から家族・家庭生活領域、省エネルギーやリユース素材の活用、無駄のない布の裁ち方の検討といった観点から消費生活・環境領域に関連した学習への展開も可能となる領域横断的な学習の拡がりを期待できる家庭科の題材となり、簡単鍋カバーの製作という実践的・体験的な活動を通して主体的な学びが可能となる指導計画を検討した（図1参照）。

2) 5年生家庭科における学習指導計画

2020（R2）年の2学期に滋賀大学教育学部附属小学校5年生家庭科の学習のなかで「ミシンで作ろう！自分や家族への手作り布製品」に取り組んだ。高学年になり家庭科の学習を楽しみにしている児童が多く、製作活動への意欲・関心は高いが、先行して行った手縫い学習のエプロン製作に際しては、イメージした形や大きさの作品を作ろうとして失敗しながら学ぶ姿が見られ、主体的に製作に必要な材料を考え、製作計画を立てる力はまだ身につけていなかった。

そこで本実践では「自分や家族のために〇〇をしたい」という願いを軸に学習を展開し、その願いを形にするために児童自身が準備する材料や製作計画を主体的に考え

られるようにした。そして、自分や家族に合ったよりよい工夫を探究しつつ、これまでの自分や家族の生活を見直す契機にすることをねらいとして設定した。さらに各自が工夫して製作した簡単鍋カバーを調理実習で活用したり、調理に臨む主体的な意欲と家庭での活用を促すことも期待できると考えた。

そして「自分にもできるかな」、「どのように作るのだろう」といった疑問を課題として取り上げ、自分の生活経験、調べた知識、学んだ技能を活用しながら課題解決の方法を主体的に検討しながら製作する活動を計画した。ちょうど新型コロナウイルス感染対策が求められる状況下での指導計画であったが、フェイスシールドを活用しながら意識的にグループでの意見交換の場をつくり児童相互の気づきを促す場面を設けることとした。

学習目標は、ミシンの取り扱い方及び安全な使い方を理解して布を用いた製作ができること、自分や家族の生活を豊かにする理想の布製品の製作に向けて計画を立てること、製作に必要な材料や知識を調べることができることを設定した。

評価基準は以下の通りである。（知識・技能）ミシンの使い方を理解し、安全に使うことができる。布製品の製作の仕方を理解し、製作することができる。（思考・判断・表現）自分や家族が喜ぶ布製品について考え、実際に製作するために必要な材料や知識を判断して計画を練り、製作に生かしている。（主体的に学習に取り組む態度）布製品の種類や布の使われ方に興味をもち調べようとしている。自分や家族の生活を豊かにする布製品について考えを工夫しようとしている。

そして全16時間の指導計画を立てた（表1参照）。第1次の学習では、ミシンの安全な使い方を知り、練習布を使って布マスクをミシンを用いて製作した。そのうえで手縫いとミシン縫いのメリットデメリットについてグループで話し合い、縫う箇所に応じた縫い方を選択する知識の習得を目指した。

第2次の学習では、布製品の魅力や製作方法について学び、鍋カバーという題材と出会い、その役割を考え、自分や家族へのプレゼントとするためにどのように工夫して製作するか計画し、「自分や家族のために〇〇な鍋カバーを作りたい」という思いを高めようとした。よりよい鍋カバーについて考える際には、教師が製作した簡単鍋カバーを提示して話し合い、児童自身が製作に際して工夫するポイントを具体的に考えられるようにした。

また理想の簡単鍋カバーの製作に着手する前に、児童が各家庭にある鍋の形状と大きさを採寸し、それに合わせた製作計画を布見本を使いながら実践的に検討できるようにした。そして一人ひとりが必要な材料を準備し、布の裁ち方を考え、縫う箇所に応じた縫い方を選択するなど、工夫しながら主体的に考えて製作できるようにした。

最終の第3次の学習では、計画に沿って理想の簡単鍋カバーを製作し、最後に工夫したポイントに注目して製作した鍋カバーを見せあう場を設けた。



図1 簡単鍋カバーを用いた領域横断的学習

表 1 簡単鍋カバーにかかわる学習指導計画

第 1 次 (7 時間)	1・2・3・4	ミシンについて知ろう
	5・6	ミシンで簡単な製作をしよう (マスク)
	7	ミシンと手縫いの違いは何だろう?
第 2 次 (4 時間)	8	布製品について考えよう
	9	より良い鍋カバーを作るためには
	10	自分の理想の鍋カバーを考えよう
	11	実際に作るための計画を立てよう
第 3 次 (5 時間)	12・13・14・15	鍋カバーを製作しよう
	16	製作した鍋カバーを見せ合おう

3) 授業実践の振り返り

第 1 次の学習では手縫いとミシン縫いのメリットとデメリットについて考え、縫う箇所に応じた縫い方を考える力を引き出すことを目指した。ワークシートの記述をもとに、児童の主な気づきを表 2 にまとめた。児童はそれぞれの縫い方のメリットに気づき、必要に応じた縫い方を選択する土台となる知識を確認することができていた。一方で、デメリットとして指摘された事項には、児童が苦手意識を抱きやすい家庭科の学習課題が表現されており、今後の学習のなかで玉どめ、玉結びやミシンの糸かけの知識と技能を補い実践力を高める必要性がうかがえた。

授業実践全体を振り返ると、5 年生でも問題なく簡単鍋カバーを製作可能であった。児童一人ひとりが自宅では保温したい鍋などを採寸し、作り方の手順と留意点を主体的に考えながら、自分や家族が活用する場面を想像し、こだわりポイントを工夫して理想の簡単鍋カバーという袋物を製作する学習を展開できた。よって、簡単鍋カバーは直線縫いのみで製作できる題材の 1 つとして有用であるといえる。

しかしエプロンやリュックサックといった身近な生活用品と異なり、児童のみならず保護者においても認知度が低い鍋カバーがどのような物かを理解するまでに時間を要し、第 2 次の学習時間を追加する必要が生じた。また鍋カバーについて理解してからも、各家庭での調理の内容や頻度は想定以上に多様であったことから、鍋カバーがあると便利と感じる児童と、必要ないと感じる児童に分かれた。その結果、鍋だけでなく、電気ケトル、ティーポット、マグカップを保温するカバーを製作するという多様な展開になった。そして簡単鍋カバーに刺繍したり、持ち手をつけたり、フライパンやケトルの形状に合わせてたり、1 枚の布を無駄なく裁つことで鍋座布団と小物入れも製作するなどの工夫が見られた (写真 6～9)。

さらに 1 人ひとりが理想の簡単鍋カバーを製作するために必要な材料を検討するなかで、全員が保温性を高めるためにキルト生地を選択した。その際に「寒い季節を快適に」の学習と関連させ、布の種類によるあたたかさの違いや布を重ねることによる保温効果などの学習を実践的に行うことができた。

表 2 手縫いとミシン縫いのメリット・デメリット

	メリット	デメリット
手縫い	糸を通すだけで準備が簡単 自分のペースで縫える 丸くまがっているところもぬえる 縫い目の粗さを自由に変えられる いろいろなぬい方ができる 場所を選ばずどこでもぬえる	玉どめ、玉結びが難しい、めんどう 玉どめ、玉結びがゆるいと抜ける スピードが遅い、時間がかかる ぬい目がずれる、まっすぐぬえない 丈夫でない
ミシン	自動なので楽に縫える 早いので時間短縮できる スピードやぬい目を調節できる まっすぐに早くぬえる 同じぬい目でぬえる 上糸、下糸があるので丈夫	上糸、下糸の準備に時間がかかる 方向を変えるときに止めないといけない



写真6 簡単鍋カバー（両手鍋）



写真7 簡単鍋カバー（フライパン用）



写真8 簡単鍋カバー（ティーポット用）



写真9 簡単鍋カバー、座布団、小物入れ

4) 家庭での実践

①冬休みの自由課題

2020（R2）年度は新型コロナウイルス感染対策のため調理実習のなかで活用する機会を設けることはできなかったが、冬休み前に一人ひとりが製作した簡単鍋カバーを自分や家族への贈り物として持ち帰ることができた。そして冬休みに児童が選択的に取り組む自由課題と保護者へのアンケートを配布した^{注5)}。家庭での調理の内容や頻度は多様であることをふまえて2つの自由課題を設定した。1つ目は「鍋カバーの効果を確かめよう」という課題で、湯沸かしや調理を行い、鍋カバーを活用した場合としない場合とで30分後の保温効果を4段階で記録する自由課題を設定した。学級33人中29人が課題に取り組み、全員が保温効果を実感できていた。課題の自由記述をみると、保温効果を高める工夫として鍋敷やタオルを敷く（8人）、隙間を作らない、しっかりかぶせる（7人）、蓋やラップをする（7人）といった工夫が主体的に実践されていた。

2つ目は「鍋カバーを使ってエコ調理をしよう」という自由課題で、調理の仕上げに鍋カバーを活用し、加熱調理する時間を短縮するエコな保温調理に29人が取り組み、味噌汁、豚汁、ポトフ、シチュー、カレーといった汁物や、温泉卵、ロールキャベツ、肉じゃが、おでん、煮豆、プリンなどの調理に取り組んでいた。課題の自由記述をみると、鍋カバーに保温効果があること、電気やガスの使用時間を短縮できるエコ調理であること、煮込んだような仕上がりになったことを実感できていた。また家族と一緒に調理に取り組むなかで、調理前の下準備が思った以上にかかることへの気づきや、家族も鍋カバーの良さを実感してくれて嬉しい気持ちになったことが語られていた。

②保護者アンケート

2問からなる保護者へのアンケートを無記名で行い、自由課題に取り組んだ29家庭から回答を得た。「おうちで鍋帽子をこれからも使っていきたいと思いますか」という質問に対しては、とてもそう思う（75.9%）、そう思う（24.1%）、あまり思わない（6.9%）で概ね肯定的評価であった。一方で、「鍋カバーを使うと省エネルギーになることが感じられましたか」という質問に対しては、とてもそう思う（55.2%）、そう思う（34.5%）、あまり思わない（6.9%）で、有用性を実感できた割合はやや低くなっていた。

自由記述をみると、具体的な活用の場面を設定できた家庭では「（ティーポットの保温用として）愛用していきます」、「ご飯を鍋で炊いているので毎日活用させていただいています」、「ヨーグルトメーカーにもぴったりで節電が期待できます」などのコメントが記述されていた。

この冬休みの自由課題であった保温効果の確認とエコ調理の実践を通して、児童全員が保温効果を実感することはできていたことは評価に値する。その一方で、保護者アンケートの結果をふまえると、鍋カバーを活用した

エコ調理の実践よりも保温効果に注目した方が鍋カバーの有用性が意識されやすく、省エネルギーを意識した主体的な行動につながると考えた。例えば、買って来た温かい焼き芋やお惣菜、調理した汁物や煮物の保温のために簡単鍋カバーを活用すると保温効果があり、温め直しに要するガスや電気を節約できる場面を具体的に想定した学習が有効であると考えられる。このように日常生活場面のなかで活用できる具体的な場面を提案しつつ、保温効果のメリットの気づきを促す工夫が求められる。

5) 学習指導計画改善の試み

2021 (R3) 年度には、製作は6年生の題材にすることを念頭に、5年生の「寒い季節を快適に」の学習のなかで、布を重ねたり、隙間をなくすことのメリットを学習する際に、簡単鍋カバーに触れる授業実践を行った。これは鍋カバーという未知の題材に出会う機会を得ることも目標の1つとした学習である。

この「寒い季節を快適に」過ごすための保温の工夫に気づかせる学習に際して、授業で用いる視覚教材を滋賀大学教育学部家政教育講座3回生が作成した。この教材は、2人の登場人物「こまったさん」と「エコエコさん」の住まいを見比べて、間違い探しの要領で保温効果を高める工夫や住まい方を発見するパワーポイントのライドである。間違い探しの主なポイントは、着衣（薄着と重ね着、靴下）、窓からの彩光、エアコンの設定温度、トイレや風呂における蓋の活用に加えて、調理や食事の場面で鍋カバーの活用を取り入れた（写真10・11）。

この視覚教材を通して重ね着をしたり、蓋やカバーを用いて隙間をなくすことで保温効果が得られることを学習したうえで、鍋カバーを活用して「布を重ねるとどれくらい保温できるか」について保温効果を主体的に体験する学習を展開した。この授業実践のためにあらかじめ実験する6班分の簡単鍋カバー、鍋座布団、デジタル温度計を準備した^{注6)}。

2022年1月18日に行った実験に際して、各班の調理実習台に2つの鍋を準備し、それぞれ1.5リットルの水を入れておいた。児童は2つの鍋を沸騰させて温度を測定して記録し、片方の鍋に鍋カバーをかぶせ、もう1つの鍋はそのまま放置した（写真12）。小学校の45分授業のなかで行う保温実験であったため、測定と記録に時間を要した結果、放置時間をわずか15分しか取れなかったが、外気温が10℃という寒い日であったことに加えて、新型コロナウイルス感染対策のために窓を一部開放して換気していたため、短時間でも温度変化の違いを確認できた。

最初にお湯を沸騰させた時点での温度が94～97℃であったところ、そのまま放置した鍋は、実習台の位置が換気窓に近いかどうかでばらつきがあったものの、40～60℃まで温度の低下が確認された。一方で、簡単鍋カバーをかぶせていた鍋はどの班も70℃台を維持し保温効果を実感することができていた。

これらの「寒い季節を快適に」の学習のなかで、保温



写真10 違い探しライド例1



写真11 違い探しライド例2



写真12 保温実験の様子

の工夫に気づかせる視覚教材の活用（1時間）と保温効果を確認する実験（1時間）を5年生3学期の寒い時期に学習したうえで、6年生で簡単鍋カバーの製作を行うことでスムーズに学習が展開できると考えられる。

4. まとめと今後の課題

衣生活、食生活、住生活や家族、消費生活、環境も含めた領域横断的な学習活動を展開できる題材となる簡単鍋カバーの製作を5年生の家庭科でも実践可能であることが確認できた。学習の過程で玉結びやミシンの糸かけについて苦手意識を抱きやすい状況が浮き彫りとなり、それらの知識と技能を補う必要性が指摘された。

簡単鍋カバーを製作する学習の主軸は手縫いやミシン縫いの知識と技能を習得したうえで、実際に製作するという衣生活分野の学習であったが、相手性を意識した学習を展開することで、自分や家族の生活を豊かにする道具を工夫しながら製作し、持ち帰って家庭で活用する活動に展開可能な題材として活用できた。エプロン製作をした後の発展学習として取り組んだため、大きな失敗を

する児童はいなかった。

初年度の実践を通して、未知の題材である鍋カバーについて知ることには時間を要したことが課題となっていたことから、まず5年生で保温効果を高める工夫の学習の一環で鍋カバーと出会い、6年生で簡単鍋カバーを製作する学習の流れがスムーズであると考えられる。

また今後の授業展開の可能性としては、家庭科の学習活動のなかで自ら製作した簡単鍋カバーを活用し、その保温効果を確認する学習を取り入れることや、調理実習の調理のなかで温め直しに必要なエネルギーを削減する効果を実感できるような学習指導計画や、自分や家族が時間差で食事する場面等を具体的に想定して保温効果が日常生活で役立つことを実感できるような授業展開も有効であろうと考えられる。そうした学びが深まることで、家庭での実践的活用にもつながり、主体的に家事に関わったり、家族との関わりを促す題材となることが期待できる。さらには、火なしコンロの歴史に触れた食生活や住環境の変遷や、エネルギー資源に関するマクロな社会的学習展開などと選択的に組み合わせることで教科をも超えた領域横断的な授業展開の可能性も考えられる。

今回は、各家庭における調理の内容や頻度が多様である現状に対応して、一人ひとりが保温する鍋、電気ケトル、ティーポット、マグカップに合わせた製作を行った。各家庭の事情を把握して本実践の取り組みを進める必要があると同時に、予想以上に各家庭の生活様式の多様性の幅が大きいことを念頭に授業展開する必要があることも重要な気づきであった。このことは「調理」という言葉ですら、生活体験が多様であるがゆえに児童がイメージするものと教師が期待するイメージの乖離が予想以上に大きい現状を示唆している。とくに家庭科では、生活体験の多様性をふまえることが授業実践の前提としてより重要な意味を持つといえる。このことから、狙いとする学習目標を達成するためにも「教師が期待するイメージ」の不確かさを意識しつつ、伝えたいことを伝えるために必要な前提条件を確かめながら授業展開することが大切である。

注

注1) 保温のため、東北などの寒冷地を中心として冬期に米飯の凍結を防止のためにおひつをエジコ（嬰兒籠）に入れた保温が日常的に行われていた。

注2) 羽仁もと子を中心とする全国友の会創刊で、1903（M 36）年創刊時は『家庭の友』。社会が近代化する明治期に、家事・育児に専念する専業主婦が誕生し、より良い家庭生活を目指して、家事、家計、子どもの教育、健康等の暮らし全般に関わるテーマを扱う主婦雑誌として誕生した。

注3) 鍋座布団のカバーや座布団の詰め物として、衣類のリユースのため附属幼稚園の保護者から提供いただいた衣類を活用した。

注4) 温度計は約5秒で測定でききるデジタル温度計

Thermo Pro を用いた。

注5) 家庭での活用を期待する言葉に加えて、保温調理の際には食中毒のリスクに注意して上手に活用してほしい旨の注意喚起を行った。

注6) 布地や温度計は、2021（R3）年度滋賀大学教育学部学部プロジェクト予算により購入した。また簡単鍋カバー製作に際しては、滋賀大学教育学部卒業生西田早苗氏の協力を得て製作した。

引用文献

- 1) 押田勇雄（1983）「物理学から見た調理」『食のことば』柴田武・石毛直道編、ドメス出版、p.158
- 2) 婦人之友社編集部編（1916）「火なしこんろの使い方」『婦人之友』10（3）婦人之友社、pp.118-121
- 3) 大阪瓦斯株式会社社史編集室（1955）『阪瓦斯五十年史』、p.141
- 4) 婦人之友社編集部編（2012）『魔法の鍋帽子® かぶせておくだけ! ふっくら保温調理 レシピ 85』、婦人之友社、p.119
- 5) 釜井潔子（2003）「中学校技術・家庭科における環境教育の指導と評価に関する研究—環境に配慮した教材を通して—」『調査研究 平成14年度』142やまぐち総合教育支援センター、pp.195-200
- 6) 栗原恵美子、和田早苗（2018）「SDGs意識を高める余熱保温調理の中学校家庭科授業実践の効果と可能性」第61回日本家庭科教育学会大会 研究発表要旨集（於：茨城大学）
- 7) 前掲4) pp.122-123

（追記）

本論文は、2020年度滋賀大学教育学部附属小学校5年生およびその保護者、2021年度滋賀大学教育学部附属小学校5年生および滋賀大学教育学部家政教育講座4回生の協力を得て実施したものです。協力いただいた児童、学生みなさんに感謝申し上げます。